

桓温から謝安に至る東晋中期の政治

— 桓温の府僚を中心として —

金 民 壽

【要約】 本稿は、従来不分明な点の多かった、桓温と謝安の政治についての考察である。方法論としては、東晋南朝に於ける北来貴族優位の原因とその権力基盤を、六朝独特のものである將軍府のあり方に求めた。従って、当時の政治の実態の究明も、桓温の將軍府の分析を通じて試みる。まず、会稽王昱、桓温、謝安が互いに絡み合っている次の点について検討する。第一に、会稽王昱を中心とした清談の盛行と、一方の一部貴族間に起こる反老莊思想氣運の時代背景を追跡する。第二に、桓温という存在は、清談貴族から荊州軍閥に、更に建康貴族の首領へと変貌する。その所以を明確にし、桓温が荊州寒門と軍將に支持された改革派貴族であることを証明する。第三に、謝安の登場、謝安の政權掌握の秘訣、支持階層と政策を明かにし、謝安が北来貴族と江東豪族に支持された保守派貴族であることを確認する。そうした政治全般の考察の結果に基づき、東晋中期とは、「新出門戸」である譙郡桓氏と陳郡謝氏の改革派と保守派が相対立した政治過程で、貴族勢力は極盛期を迎える反面、反貴族的新傾向が顕出される時代であったと規定する。

史林 七五卷一号 一九九二年一月

はじめに

東晋の約百年間の政治は初期、中期、末期の三期に分けて考えることができる。初期(三一七年—三四四年)は多少の政治的危機もあったが、魏晋以来の名族である琅邪王氏と潁川庾氏によって、門閥貴族政治が安定していた時期である。中期(三四五年—三八五年)は、政治を統轄した桓温の抬頭から謝安の死までとみる。そして末期(三八五年—四二〇年)になると、

孝武帝と皇族司馬道子・元顥が専権を振り、それに反撥した貴族層が政争を起す。その際に、いままで貴族の支配に抑えられていた社会底辺の諸不満が一挙に爆発する。寒人が政界に進出してくるし、一般民衆の側からは孫恩・盧循の乱が起り、寒門軍人は貴族の手から軍事権を奪い、やがて劉宋政権を成立させるに至る。東晋時代の政治を概観すると以上のようなになる。

その中で、とりわけ東晋中期に関する研究は極めて手薄である。それは史料が大幅に欠落しているせいであるとも考えられる。しかし最近、北京大学の田餘慶氏による『東晋門閥政治』が刊行され、既存の研究の空白を大いに埋めている。氏の研究の要点は次のごとくである。従来よく使われてきた「魏晋南北朝門閥政治」というのは、実は東晋時代においてしか存在しなかった。その門閥政治の存在形式は、門閥士族と皇権の共治であったという観点から、東晋一代を琅邪王氏、潁川庾氏、譙郡桓氏、陳郡謝氏、及び太原王氏の各門閥に分けて、ほとんどすべてといていいほどの関係史料を駆使して、一門閥と政権との関わりを通して東晋政治の変遷を論じている。特に、門閥貴族が勢力を強めて抬頭してくる後ろ楯として軍鎮を掌握することを挙げ、それに重点をおいて極めて緻密に跡付けている。本稿も氏のすぐれた研究に負うところ大である。

しかしながら、田氏の東晋中期に関する研究は、貴族と州鎮との関係に重きをおき過ぎて、地方豪族との関係があまり考慮されていない嫌いがある。というのは、一門閥貴族勢力の族的拡がりを忠実に追うのも大切なことではあるが、一方では、或る門閥を説明するにあたり、各々の門閥を支えている社会の支持層、つまり権力基盤を通じてより深く検討する必要があると思われるからである。本稿ではそれを追究するための手掛かりとして、前稿と同じく、東晋中期の政治を担った人物の將軍府の僚属を分析する方法を使ってみたい。^③ 將軍府の府僚は、一般に府主が最も信頼し得る人々である。府主と府僚は互いに、前者は自己の政治的勢力を扶植する目的で、後者は立身的手段となすために、私的といっているほどの密接な関係で結ばれていた。しかも当時の府僚一人一人は個人としてだけではなく、家柄と郷里という背景をもつ存

在として考えられた。したがって、桓温政権と謝安政権を考察するにあたっては府僚の構成の性格を分析することが、有効な方法であろうと期待できる。実は、そのように府僚を重視する考えは桓温時代にもあったようである。それは『世説新語』に桓温の『征西寮属名』と『大司馬寮属名』という書名が見えることから窺える^④。本稿ではそれを現存の史料からできる限り復元してみようと思う。

さて、日本における東晋中期に関する従来の諸研究は、研究論文の数も少く、かつ断片的なものであったように思われる。たとえば、簡文帝を中心とした清談については思想史の方面で、桓温政権については政治史の方面で、別々に行なわれ、どちらか一方だけを研究対象としてきた。しかし実は、簡文帝の清談グループと桓温政権と、さらに謝安政権とは深く関連しあっているので、分離して考えるはその性格を究明することが難しい。したがって本稿では、当時の政治状況の全般を視野に入れて、政治の全体像を追うことによって、桓温政権と謝安政権の性格を明らかにしようと思う。それが本稿の目的である。

① 東晋中期の政治史に関する論文として、桓温については、石田德行「東晋の荆江軍閥——譙国龍亢の桓氏の場合——」（『軍事史学』六一四、一九七一年）、川合安「桓温の省官併職政策とその背景」（『集刊東洋学』五二、一九八四年）があり、謝安については、安田二郎「褚太后的臨朝と謝安」（『中国史と西洋世界の展開』一九九一年）がある。思想史には、青木正児「清談」（『岩波講座東洋思潮』八、一九三四年）、福永光司「王羲之の思想と生活」（『愛知学芸大学研究報告・人文科学・自然科学』第九輯、一九六〇年）、蜂屋邦夫「王坦之の思想——東晋中期の莊子批判——」（『東洋文化研究所紀要』第七五冊、一九七八年）などがある。また、岡崎文夫『魏晋南北朝通史』（弘文堂書房、一九三二年）の「抑も東晋の王室は、其健康に基を開いた以来、かつて独裁の権勢を振ったことなく、北来の強族と江南の土豪とが互いに相結ぶ中間の内在物として晋の王室を役立てたわけであって、東晋一流の政

治家王導謝安の如きは、よく此間の情事を体して寛治の方針に始終したのであった」（二一八頁）ということは、東晋政治史を考える上で重要な指摘であろう。

② 田餘慶『東晋門閥政治』（北京大学出版社、一九八九年）。氏の研究は、東晋門閥政治と比較できる前後時代の論文が発表されていないので、ここでは全体の論旨については触れず、東晋中期に關してのみ論ずる。

③ 拙稿「東晋政権の成立過程——司馬睿（元帝）の府僚を中心として——」（『東洋史研究』四八—二、一九八九年）

④ 『世説新語』の劉孝標の注のなかに、『征西寮属名』は言語篇、排調篇に引かれている。『大司馬寮属名』は大司馬桓温の参軍伏滔によるもので、賞誉篇、黜免篇などにみえる。

第一章 將軍府（都督府）の構造

筆者は六朝政治史を將軍府という一貫したものをもって捉えようと考えている。後漢末期から六朝にかけて、將軍府が異様に発達したことは、すでに周知のことであり、なお將軍府に関する制度史の論文も数多くある。^①しかしながら、具体的な將軍府の実態と変遷の究明という問題になると、ほとんど明らかにされていないのが現状である。嚴耕望氏の大研究の消化作業ともいえるだろうか。国家権力の特に弱かった六朝の場合は、或る制度のみを抽出し検討してみても、その制度の実態や変化を突き止めることが難しいようである。そこに六朝制度史の研究の難しさの原因があるだろう。その打開策は具体的な政治史のなかで、たんねんに検証してみるほかに方法はないであろう。その当面の課題を究明する作業の一つとすることが本稿の意図である。

將軍府（都督府）の実態を考察することは、東晋南朝史の基調というべき南人豪族に対する北来貴族の優位という問題にも実は関わってくる。一体、北来貴族の政治的優位が如何にして生じたか、という問題について、従来それをめぐる最も有力な説は越智重明氏の南北地縁性説であった。^②つまり、北来貴族は南土においてその政治的優位を確保するため、北人の地縁性を維持する必要があった。その方策の一環として白籍を造りだし、その籍に着く北来の庶人には役を免除させた、という説である。しかしながら、その論考の史料的根拠は「范甯の上疏文」しかない。一方、その論の基本前提である北人が無役であったことに疑問を投げ掛けたのが、安田二郎氏である。氏の論ずる如く北人が役の負担者であったという史料が幾つかある。さらに、問題の咸康七年の白籍の史料は、庾亮の北伐準備のさなかであった当時の政治状況からみて、北人の役の免除のために実施された、とはどうしても考えられない。しかも北来貴族の優位は、すでに東晋政権の成立期にはほぼ決定的なものになっていた。従って北来貴族優位Ⅱ南北地縁性説Ⅱ白籍造出説には再検討の余地があると思われるが、いまのところ、どちらも決定的な証拠はないようである。

それでは、東晋成立以來、南人豪族はどうして遂にその勢力を盛り返すことができなかつたのであろうか。その理由をほかに考えられないであらうか。筆者はその原因を、都督府（或は將軍府）と地方行政のあり方に求めたい。周知のように、もともと州刺史とは郡の上になつた監察機構であつたが、漢末に地方行政官庁化した。その州刺史が多くの土着の地方豪族を属僚にし、あるいは逆に地方豪族が中央から派遣されてきた州刺史を迎えて、ともすれば州は地方割拠勢力の拠点となつた。それが他でもない魏、蜀、呉であつた。^④ところが、それが東晋になると事情が変わり、都督府というものが州刺史府の上にのしかかるのである。都督というものはすでに魏からあつたが、軍隊を督するものにすぎなかつた。それが西晋末・東晋初の時から、都督府というものが正式に州の上に常設される。しかも同一人物が都督と領下の州刺史を兼領することになり、都督府（或は將軍府）は次第に州刺史府の行政業務まで蚕食し、都督府と州刺史府とは上下關係になつて、州職の上層部はやがては実権をほとんど持たない名譽職にすぎないものになつてしまふのである。従来通り州刺史府には土着者のみを辟召したが、都督府（或は將軍府）には土着・非土着を問わず召して属僚とした。東晋のほとんどの都督が北人であつた關係から、將軍府の上層部は北來貴族によつて占められた。さらに、東晋中期になると都督府の上層僚屬が地方官をも兼ねるようになる。そうなると、下層の參軍層に多く就いていた土着南人豪族の出る場は益々狭くなつてしまふのである。一方、郡太守も將軍号を帯びるようになり、郡太守府の上に將軍府を開いた。地方の在貫者に限つて任用した郡太守府とは異なり、郡將軍府には非在貫者が多く、郡太守の私的な幕府の性格を帯びていた。従つて、そのような状態の下において、州と郡の在地南人豪族は上から抑えつける北來貴族を跳ね返すことが容易にはできなかつたのだらう。そうした地方行政体制こそが、南人豪族がついに北來貴族を乗り越えることができなかつた制度的裝置ではなかつたのではなからうか。もちろんかかる構造がより高い次元の家格の原理によつて動かされていたのはいうまでもないことである。

以上で述べてきたことと関わる東晋中期に初出する二つの問題を付け加えておこう。先づ一つは、將軍府の上佐が管轄下の郡太守を領することについてである。

輔国將軍桓温は袁喬を司馬・領広陵相に（『晋書』卷八三袁喬伝）

征西將軍桓豁は謝玄を司馬・領南郡相・監北征諸軍事に（卷七九謝玄伝）

冠軍將軍謝玄は殷仲堪を長史・領晋陵太守に（卷八四殷仲堪伝）

彼ら袁喬、謝玄、殷仲堪の三人は、長史あるいは司馬として首郡を領している。袁喬と殷仲堪は、当時秘書郎に次ぐ非常に名譽ある佐著作郎起家の門地二品の名族である。謝安の甥の謝玄は説明するまでもない。こうした事例から、將軍府の長史、司馬が首郡を領する制度の始まりは、都督の北来貴族が彼ら名門貴族を幕下に辟召するために考え出された優遇措置であったと思われる。

もう一つは、東晋中期になると、中央の録尚書事、尚書令ばかりでなく、尚書僕射までもが將軍号を帯びるようになることである。

太原王述、尚書令・領衛將軍（卷九三王述伝）

陳郡謝安、尚書僕射・領吏部尚書・加後將軍（卷七九謝安伝）

太原王蘊、尚書左僕射・左將軍（卷九三王蘊伝）

琅邪王珣、尚書左僕射・加征虜將軍（卷六五王珣伝）

以上のように、超一流貴族ばかりが尚書の実務とは全く関係の無い個人の將軍府を有している。その將軍号が名目だけではなく、実際に文武僚屬を揃えていたことは、次の「〔謝安〕頃くして司徒を加う。後軍の文武、尽く大府に配せよ」という事柄によって明らかである。後の司馬道子の政治を非難した内容の一つに「權寵の臣、各々小府を開き、吏佐を施置するは、官に益無く、国に損有り」ということを挙げているが、それは貴族たちの間にはすでに東晋中期に横行していたことであった^⑥。さらに甚だしきは陳郡謝琰の場合で、彼は護軍將軍でありながら、個人の右將軍府をも領している^⑦。つまり、貴族たちは將軍府という官職を恣意的に利用し、益々官僚制を破壊していったとしかいえないであろう。こうした貴

族の専横の極度に達したのが、皇帝権の最も弱かった東晋中期であったと考えられるのである。

では、このような視点から、東晋中期の政權担当者の將軍府を中心にしてそれぞれの権力基盤を探る場合、それは如何なる展開をみせるのだろうか、その具体的な変化の側面を確認していこう。

① 代表的なものとして、浜口重國「所謂、隋の郡官廃止に就いて」

一九五九年）など氏の一連の研究参照。

② 『秦漢隋唐史の研究』下巻、東京大学出版会、一九六六年、越智重明「南朝州鎮考」、『史学雑誌』六二—二、一九五三年）、宮崎市定

③ 安田二郎「僑州郡県制と土断」、『中国貴族制社会の研究』、一九八七年。また土断についての諸論文は安田氏の論文の注を参照されたい。

「第三章 南朝における流品の発達 五 軍府僚属、殊に参軍の発達」、『九品官人法の研究』、同朋舎、一九五六年）、嚴耕望『魏晉南北朝地方行政制度』（中央研究院歷史語言研究所專刊四五、一九六三年）

④ 狩野直禎「後漢末地方豪族の動向——地方分権化と豪族——」、『中国中世史研究』、東海大学出版会、一九七〇年）

などがある。

⑤ 『晋書』卷七九謝安伝。
⑥ 『晋書』卷六四司馬道子伝。
⑦ 『晋書』卷七九謝琰伝。

第二章 譙郡桓氏と陳郡謝氏の抬頭

東晋初期は琅邪王氏と外戚の潁川庾氏によって政治的安定が確立された。ところが、永和元年（三四五）二歳の穆帝が即位し、皇族の会稽王司馬昱が輔政の任に就いた。そのころ、徐々に抬頭して東晋中期の政治を動かした門戸が、譙郡桓氏と陳郡謝氏である。そのうち、謝氏の場合は、南朝では琅邪王氏と並んで「王・謝」と併称される超一流の名門であるが、しかし東晋中期までは、むしろ譙郡桓氏と非常に共通点が多い家歴をもっていた。すなわち両家は、東晋初期の政治を担当した琅邪王氏と潁川庾氏とは、その性格を異にしていたのである。先ずは、両家が伝統ある後漢以来の名門からわけへだてられた待遇を受けていたことがそうである。

王文度（太原王坦之）、桓公（桓温）の長史為る時、桓、児の為に王の女を求む。王、藍田（太原王述）に咨らんことを許す。既に置く。藍田、文度を愛念し、長大なりと雖も猶お窺上に抱著す。文度困りて言う「桓、已が女の婚を求む」。藍田大いに怒り、文度を排して窺より下して曰く「悪んぞ見ん、文度の已に復た癡にして、桓温の面を畏るるを。兵なり、那ぞ女を嫁して之に与う

可けんや」。文度還りて報じて云う「下官の家中、先に婚処を得たり。桓公曰く「吾知れり。此れ尊府君肯せざるのみ」。後に桓の女、遂に文度の兒に嫁ぐ（『世説新語』方正第五）。

とあるように、桓温は太原王氏から、兵と蔑まれて婚姻を断られた。同じく陳郡謝氏も、

謝方は兄の前に在りて、起ちて便器を索めんと欲す。時に阮思曠、坐に在りて曰く「新出の門戸、篤なれども礼無し」（『世説新語』簡傲第二四）。

また、

（潁川荀）伯子、常に自ら隱籍の美を矜りて、（琅邪王）弘に謂いて曰く「天下の膏粱、唯だ使君と下官とのみ。（陳郡謝）宣明の徒は数うるに足らざるなり」（『宋書』卷六〇荀伯子伝）。

とあり、後漢以来の名族である潁川荀氏、陳留阮氏から新出門戸として軽蔑して呼ばれていることは注目にあたいする。^①

桓氏は、漢代には累世帝師であったが、魏晋代にはそれほど振わなかった。^② 陳郡謝氏も、魏・西晋時代には一人も正史に立伝されていない田舎豪族にすぎなかった。

そうした両家の発展の転機となったのが、西晋末期にいち早く渡江し、建康の清談グループに加わったことである。

（光逸）初めて至る。属たま（胡毋）輔之、謝鯤、阮放、畢卓、羊曼、桓彝、阮孚と散髪裸袒し、室を閉じて酣飲すること已に累日。……時人、之を八達と謂う（『晋書』卷四九光逸伝）。

とあるように、両家の桓彝と謝鯤が清談貴族の社交界に仲間入りをはたしてから、両家は政界に浮上しはじめる。桓彝は蘇峻の乱に節をまげず乱徒によって非業の死を遂げる。謝鯤は王敦の長史でありながら最後まで反乱者王敦に協力しなかった。つまり、二人は東晋初の戦乱の際に朝廷に忠誠を尽くした、といい得る。このように両家は、伝統ある「旧来門戸」に対して、東晋時代から抬頭してきた「新出門戸」であったのである。

両家のさらなる飛躍的發展は、桓彝の子の桓温と、謝鯤の子の謝尚の時代である。彼ら両人は早くから会稽王昱の清談

サロンでその才が注目されていた。

簡文帝の会稽王と為るや、嘗て孫綽と諸風流の人を商略す。綽言いて曰く「劉惔は清尉簡令、王濛は温潤恬和、桓温は高爽逸出、謝尚は清易令達なり、而れども濛が性は和暢にして、能く理を言い、辞は簡にして会有り」(『晋書』卷九三外戚王濛伝)。

会稽王の輔政が始まってから間もない頃、「清談の宗」と認められていた劉惔・王濛と並んで、桓温と謝尚がとり上げられ、人物評価されていることは非常に興味ぶかいことである。会稽王の清談界に颯爽と登場した彼ら二人は、会稽王の輔政とはほぼ同時期にそれぞれ出鎮する。謝尚は都督・豫州刺史に、桓温は都督・荊州刺史に。それ以後、豫州と荊州の軍事都督権は、長らく陳郡謝氏と譙郡桓氏によって掌握されるようになり、両家の勢力基盤となる。

門戸の成長過程にこうした多くの共通点をもっている両家が、のち如何にして、各々貴族門閥として成功と失敗の途をたどるようになるのであろうか。それを各々の事迹からみていくことにするが、その前に両家が関わっていた建康政府の動向から考察してみよう。

① 唐長孺「土族的形成和升降」(『魏晋南北朝史論拾遺』、中華書局、一九八三年)、前掲の田餘慶「桓温的先世和桓温北伐問題」「陳郡謝氏与淝水之戰」(『東晋門閥政治』所収)

② 漢代の桓氏については、上田早苗「貴族的官制の成立」(『中国中世史研究』、一九七〇年) 参照。

③ 同じ話が『世說新語』品藻第九では「撫軍(会稽王昱)問孫興公(孫綽)、劉真長(劉惔)如何、曰清尉簡令。王仲祖(王恭)如何、曰温潤

恬和。桓温如何、曰高爽逸出。謝仁祖(謝尚)如何、曰清易令達。阮思曠(阮裕)如何、曰弘潤通長。袁羊(袁喬)如何、曰洮洮清便。殷共遠(殷融)如何、曰遠有致思。卿自謂如何、曰下官才能所經、悉不如諸賢、至於斟酌時宜、籠罩当世、亦多所不及。然以不才、時復託懷女勝、遠詠老莊、蕭条高寄、不与時務經懷、自謂此心無所与讓也」とある。これらの人々が会稽王昱の清談サロンの初期の代表者であったろう。

第三章 権力基盤

1 司馬昱(簡文帝)の清談サロンと撫軍(大)將軍府

永和元年(三四五)、わずかに二歳の穆帝が即位した。輔政の任に当たる人物を選ばなければならない。朝廷では例になら

って、皇太后の父の褚裒を、録尚書事・揚州刺史に任命して召し入れたが、褚裒はその地位を会稽王司馬昱に譲ってしまったのである。これから長い間にわたる司馬昱の輔政が開始される。いったい皇族である司馬昱は如何にして、輔政の座に昇ったのであろうか。それは、東晋中期政治史を考える上で、重要な意味をもつ問題であるが、従来ほとんど顧慮されていなかった。次に挙げる史料はその顛末を示唆している。『世説新語』言語篇の劉孝標の注に引く『晋陽秋』に、

（何）充の卒するや、議者謂えらく太后の父（褚）裒宜しく朝政を乗るべしと。裒、丹徒より入朝す。吏部尚書劉遐、裒に勧めて曰く「会稽王は令徳にして、國の周公なり。足下、宜しく大政を以て之に付すべし」。裒の長史王胡之も、亦た藩に帰するを勧め、是に於て固く辭して京（口）に帰る。

とあって、文中の「議者」とは、朝廷の慣例を議論したものであろう。しかし、吏部尚書劉遐と、徐兗州刺史褚裒の長史王胡之が、褚裒に政柄を司馬昱に譲って帰藩することを勧めている。府僚の長である琅邪の王胡之が府主にそれを提案していることは、当時の貴族の輿論を汲み取って代弁しているものであろう。それに従って褚裒が輔政の任を辞したのは、彼の性格も要因であろうが、これまでの東晋初期政權を担当していた潁川庾氏のような外戚の専横に対する貴族の警戒も意識してのことであつたろう。同じ逸話が『世説新語』では、清談の第一人者と目されていた太原の王濛と沛郡の劉惔の話として残っている。^① その二つの資料の当否はさておき、彼らの名があげられていることは、司馬昱の執政が、当時の貴族つまり清談貴族によって支持されたことにはかならない。

皇族会稽王司馬昱は、いったい如何なる人物で、貴族たちは何故に彼を阿衡の任に推戴したのであろうか。撫軍大將軍の会稽王昱は、元帝の末子で、この時に録尚書事として万機を統べるようになり、三七一年、簡文帝として即位するまで、穆帝、哀帝、廢帝の三代約三〇年に及ぶ長い間、つまり東晋中期とほぼ重なる期間中、政權の首班の地位にありつづけた。会稽王は清虚寡欲で、最も直言を善くしたという、いわば清談の名手である。しかしながら、帝は「神識恬曠なると雖も、濟世の大略無し。故に謝安稱して恵帝の流と為すも、清談やや勝るのみ」といわれたほど政治的能力はまったく欠けてい

た人物であった。実際、彼が録尚書事にいた約三〇年間、管見によれば一度も専権を振った記録がない。つまり、貴族達はそのように無欲かつ無能な司馬昱を形式的に政府の首班の地位に据えたまま、政治を彼らの意向通り動かす意図であったのではないかと考えられる。はじめ、東晋の政局は多少の反乱もあったが、北来貴族たちは最高の門閥である琅邪王氏の王導と潁川庾氏の庾亮のもとで優遇され、揺るぎ無い政治的地位を確保し、さらに政界に清談社交界を形成した。その清談貴族の実力が会稽王を輔政の任に座らせたのであり、その清談のバトロン会稽王のもとで清談社交界は満開に花開いたのである。会稽王昱の清談サロンは、政治的安定と門閥政治の確立がもたらした最後の貴族社交界で、そこでの人物評価などの談論は、そのまま人事、政事につながるものであった。

次に、会稽王司馬昱を囲む談客を調べることによって、当時の清談サロンを覗いてみよう。会稽王昱の清談サロンでも清談に巧みな風流人は、中書郎の劉惔と王濛である。彼ら二人は早くから王導にその才を認められ、会稽王に「入室の賓」として寵愛されたが、会稽王昱輔政の初期の三四七年頃、三十代の若さで世を去った^⑤。この劉惔と王濛たちが活躍した時期、つまり会稽王輔政の初期にあたる時期が、桓温も加わり政治的な平穩も続いていた東晋清談界の黄金期であったと考えられる。それに次ぐのが陳郡殷浩である。彼らのほかにも太原孫盛、太原孫綽、呉郡張憑、僧侶支遁らを中心として、ほとんどの東晋の貴族がそのサロンに関わった。これら清談貴族が会稽王昱を推戴したその人々にほかならない。

撫軍(大)將軍会稽王昱のもう一つの腹心グループが、清談の談客と重なる場合もあるが、將軍府の幕僚である。次の表Iは、全府僚の一部に過ぎないものではあるが、おおよその傾向を窺うことはできるだろう。

最高執権者の幕府にふさわしく、名門貴族の名がつらなっている。彼ら或いはその一族が建康政府の中樞を占めていたのはいうまでもないことである。この表から、撫軍府は、北来貴族を中心として、それに江東豪族を加えて構成されていた、ということが言える。江東豪族については、広陵の高崧が、司馬に任命されていることから推して考えることができる。つまり、会稽王司馬昱の権力基盤とする清談サロンと撫軍將軍府は、これまでの貴族界をそのまま引き継いだものと

表 I 司馬昱(簡文帝)の撫軍(大)將軍府

職名	人名	出身地	備考	典拠
長史	蔡系	陳留考城	録尚書事蔡謨の子	『晋書』卷77
司馬	王坦之	太原晋陽	加散騎常侍 後大司馬桓温の長史へ	『晋書』卷75 卷83 卷73 卷67 卷71
	江庾	陳留圉縣	後御史中丞	
	鄒雲	潁川鄆陵	後潁陽太守へ	
	高崧	高平金鄉 広陵	後吏部郎更に都督徐兗刺史へ 後侍中	
從事 中郎	王坦之	太原晋陽	↑司馬へ	卷75 卷83 卷79 卷74
	江灌	陳留晋陽	↑司馬へ	
	謝万	陳郡陽夏	後豫州刺史へ	
	桓豁	譙郡龍亢	後吏部郎	
參軍	王坦之	太原晋陽	↑從事中郎へ (不就)	卷75 卷75 卷65 卷76 卷73 『世説』言語篇 『晋書』卷81 卷94
	荀羨	潁川潁臨		
	王協	琅邪臨沂		
	王越之	琅邪臨沂		
	庾邈	潁川鄆陵		
	羊乘	太山平陽		
	毛安之	滎陽陽武	後魏郡太守, 更に游擊將軍へ (不就)	
錄屈	王坦之	太原晋陽	↑參軍へ	卷75 卷75 『通鑑』345年条
	韓伯	潁川長社	後中書郎	
	郝超	高平金鄉	後征西大將軍桓温の參軍へ	
国屈	謝尚	陳郡陽夏	会稽王友	『晋書』卷79

して、東晋初期との繼承性を確認することができ。以上の人々を中心とした東晋初期の思想界における幾つの特徴を挙げてみよう。先ず、西晋元康期から西晋末期の時代の風潮であった放達の風はみられなくなる。西晋の傾覆した要因の一つが清談にあったというところに対する自戒と政治的覚醒が、その原因であったろう。しかしながら、すでに貴族の習俗となつてしまつた清談そのものは、頽俗を挽回せんとする一部の人々による激しい叱咤にもかかわらず、ついになくすことはできなかった。また、僧侶が清談に加わり、清談家も仏教に強い関心を持ち、仏理に通ずるものが登場してくる。殷浩、孫盛らほとんどの清談家がその例として挙げられる。咸康六年(三四〇)には「沙門の礼を王者に尽くす可きや否や」の論も起き、皇帝の權威さえも、貴族と僧侶の結縁のまえに規制を受けるようになっていたのである。

しかしその一方、東晋中末期になって、儒家思想を支持する立場から老荘思想を非難したり、或いは儒家思想と道家思想を折衷しようとする新しい気運が高まってくる。代表的な例をあげてみよう。^④

太原の王坦之(三三〇—三七五)は、「風格有り。時俗の放蕩にして、儒教に敦からざるを尤も非として、頗る刑名の学を尚び、『龐莊論』を著わす」という。^⑤ その『龐莊論』に「……莊子の天下を利するや少なく、天下を害するや多し。……礼は浮雲と俱に征り、偽は利蕩と並びに肆ままなり。人は克己を以て恥と為し、士は無措を以て通と為す。時に徳を履むの誉れ無く、俗に義を蹈むの愆有り。……」とあり、当時の風俗の頹廢、詭譎恢誕の『莊子』の風を非難している。また『易』に注をつけた同じ頃の人、韓伯も、陳郡周勰が喪に服しながら、礼を廢し莊老を崇尚し、名教を脱落することを非難して「下に拝するの敬すら、猶お衆に違えて礼に従う。情理の極み、宜しく多比を以て通と為すべからず」という。^⑥ また父の范汪の遺業を引継ぎ、『春秋穀梁伝集解』を完成した南陽の范甯(三三九—四〇二)は「時、浮虚相い扇んに、儒雅日に替るるを以て、甯、以為らく、其の源は王弼何晏に始まり、二人の罪桀紂より深し」といい『王弼何晏論』を著わし、清談の風を痛烈に非難している。^⑦ 時は、范甯の若き日で、桓温專權の時代であった。そのほか、もと桓温の幕僚であった孫盛も『老聃非大賢論』『老子疑問反訊』のなかで、老子を孔子と顔回よりも低く評価している。^⑧

このような批判は、もちろん東晋中末期になってはじめてあらわれたわけではない。だが、その傾向は今までとは少し違ったものがあるように思われる。これまでではどちらかといえば、少数の個人的な意見に過ぎなかったが、この時代には、政治の中枢部にあった人達が時期を同じくして、老莊思想に対して激しい非難の声をあげている点がこれまでとは異なる。確かにそうした傾向は、東晋中末期という或る時期との関わりよりは、南陽范氏、太原王氏という或る家柄の学問の仕方とむしろ深く関係しているかもしれない。しかしながら、ことはそう簡単に片付けられない側面がある。そのような論が注目をあびる何等かの状況があったと想定されるからである。彼らのほかに、もと会稽王の清談サロンの貴族のなかからも政治の弊害を説くものが出てくる。琅邪の王羲之は、会稽王に送る手紙の中で「願わくは殿下、暫く虚遠の懐を廢して、以て倒懸の急を救い、亡を以て存と為し、禍を転じて福と為すは、則ち宗廟の慶にして、四海の頼る有りと謂うべし」と懇懃に諫めている。^⑨ 吏部尚書(三三〇—三五四年在任)であった琅邪の王彪之は併官省職の政治改革の必要性を力説している。^⑩

これまで清談貴族は、王導、庾亮、会稽王昱の保護下で実際の政治に対処できる行政的能力を失いつつ、清談に耽っていた。それが会稽王昱の輔政後期において、一部貴族に既存の政治・思想に対する危機意識を招来し、こうした新傾向をもたらした背景には、いったいどのような事態が展開されていたのであろうか。それを理解するためには、時期を少く遡って目を荊州に転じて考察する必要がある。章を改めて考えてみよう。

- ① 「何驃騎（何充）亡後、徵褚公入。既至石頭、王長史（太原王濛、劉尹（沛郡劉惔）同語褚。褚曰真長（劉惔）何以处我。真長顧王曰此子能言。褚因視王、王曰固自有周公。」（『世說新語』言語第二）
- ② 『晋書』卷九前文帝紀。司馬昱は元帝の末子で、主な略歴は、撫軍將軍から、三四五年、二六歳で撫軍大將軍・録尚書六条事となり、三四五年、録尚書事として万機を統べ、三六六年に丞相、三七年に簡文帝として即位する。ちなみに表一は撫軍將軍と撫軍大將軍の府僚を合わせたものである。
- ③ 『晋書』卷七五劉惔伝、『晋書』卷九三外戚王濛伝参照。また『法書要録』九所引の『張懷瓘書断』云「……（王）濛以永和三年卒、年三九」とあり、劉惔は彼に後れてまもなく亡くなる。
- ④ 前掲（はじめに註①）の福永光司「王羲之の思想と生活」参照。
- ⑤ 『晋書』卷七五王坦之伝に「坦之有風格、尤非時俗放蕩、不敦儒教、
- ⑥ 『晋書』卷七五韓伯伝
- ⑦ 『晋書』卷七五范甯伝、吉川忠夫「范甯の学問」（『六朝精神史研究』、同朋舎、一九八四年）
- ⑧ 『晋書』卷八二孫盛伝。老子に関する二論は『広弘明集』五所収、『金晋文』は卷六三、卷六四に所収。
- ⑨ 『晋書』卷八〇王羲之伝。
- ⑩ 『晋書』卷七六王彪之伝

2 桓温の諸將軍府

① 安西將軍・都督荊司雍益梁寧六州諸軍事・荊州刺史

「豪爽にして風概有り」といわれた桓温は、三四三年頃輔国將軍・琅邪内史から、累遷して輔国將軍・都督・徐州刺史となり、さらに昇進を重ねて三四五年八月には、安西將軍・都督・荊州刺史になる。これが以後四〇餘年に及ぶ桓氏の荊州軍団支配の第一歩であった。荊州に着任した彼は、まもなく三四七年に朝廷の反対を押し切って、氏族の國家成漢の征

表Ⅱ-1 安西將軍・都督荊司雍益梁寧六州諸軍事・
荊州刺史 (345年—348年)

職名	人名	出身地	備考	典拠
長史	范汪	南陽順陽		『晋書』卷75
司馬	謝奕	陳郡陽夏		卷79
參軍	袁喬 孫盛 周楚 毛穆之 鄧遐 羅友 龔護 沈延	陳郡陽夏 太原中都 廬江尋陽 滎陽陽武 陳郡襄陽 ? 吳興武康	諮議參軍(不就)	卷83 卷82 卷58 卷81 卷81 『世說』任誕篇 『晋書』卷98 『宋書』卷100

伐を敢行して平定に成功する。怠惰と安逸の生活に慣れていた建康政府の会稽王と清談貴族は、その捷報に接するや興奮と危惧の念を禁ぜざるを得なかったであろう。では、桓温の成漢征伐を成功させた安西將軍府は、どのように構成されていたのであろうか。その実態に迫ってみよう。

桓温の安西將軍府は、大きく二つのグループに分けて考えることができる。一方は、長史の范汪が「復た庾亮の平西參軍たり、……復た亮の征西軍事に參じ、州別駕に轉ず。汪は亮の佐吏たること十有餘年、甚だ相い欽待す」とあり、參軍の孫盛も「太守(太尉の間違ひであろう)陶侃請いて參軍と為す。庾亮、侃に代わるや、引きて征西主簿と為し、參軍に轉ず。……庾翼、亮に代わるや、盛を以て安西諮議參軍と為し」とある。また參軍の毛穆之も、安西將軍庾翼の參軍であった。參軍の廬江周楚は、益州刺史周撫の子で、江南では最も有名な將帥の家である。征虜將軍・益州刺史の周撫は桓温の蜀征伐の時、主力軍をなして大功を立てる。以上の如く、桓温は東晋初期以来荊江軍閥を歴任した陶侃と庾亮・庾翼の幕下にあった人材を自分の幕府に多く受け入れ、その地域の事情に詳しい彼らを最大限に利用したことがわかる。

もう一方は次の人々である。謝奕は、元々徐州刺史桓温の管轄下の晋陵太守であったが、桓温が布衣の好を以て一緒に西へ連れてきて司馬となした人物である。また清談の名手である劉惔も征虜將軍・監沔中軍事・領義成太守として合流する。もう一人の袁喬は、桓温と最も長い付き合いがある。彼は、桓温が輔国將軍・琅邪内史であった時に輔国司馬であった。次いで、桓温が徐州刺史

に移った時にも、司馬として広陵相を領した。更に荊州刺史に昇進した桓温は、彼を諮議参軍・長沙相に拜したが、応じなかった。更に官位を上げ建武將軍・督河内三郡諸軍事・江夏相となした。彼は、桓温の蜀の征伐計画が朝廷に反対された時、その征伐に勝算があると判断し敢行することを桓温に勧めたものでもあり、蜀平定の際には、前鋒軍二千人を率いて最高の功績をたてたものでもある。そのほか、参軍に江南の大豪族の呉興沈延も見えている。つまり、もう一方とは、桓温が東から連れてきた人士たちであった。以上の如く、桓温が蜀を制圧したのは、桓温が東から連れてきた人士や軍団と、元々荊州軍府に所属していた僚属やその軍団の協力によるものであったことが明らかになった。

この時点までの桓温の將軍府は、自分もその一員であった清談サロンの要素を多分に有していて、まだ建康の会稽王昱との間に緊張関係もなかった。この時期が清談界の黄金期であったと考えられる。その平穩な清談界に波紋を投げかけたのが、実力者桓温その人であった。

③ 征西大將軍・都督荊司雍益梁寧交広八州諸軍事・荊州刺史

蜀を併合した功績によって桓温は、征西大將軍・都督八州諸軍事・荊州刺史に昇進する。桓温が蜀を平定したことは、東晋の宿願であった中原恢復の第一歩として熱狂的に歓迎されるべきことであった。しかしながら、中原恢復という名分とそれが実際に達成されつつある現実をまねにして、それまで無事安逸主義にあり、執権者の保護下にその特権が温存されてきた建康の清談貴族たちは、自分達の足元が新たな勢力によって危うくされるかもしれない、と警戒しはじめた。その頃、中原では羯族石氏の後趙政権が崩壊して大混乱状態に陥っていた。桓温はその機会に中原奪還をめざして北伐を願い出るが、桓温の勢力が更に大きくなることを畏れた建康政府によって阻止される。そこで、桓温は建康政府をにらんで相対峙しながら、地盤固めに着手する。

君臣の跡有りと雖も、亦た相い羈縻するのみ。八州の士衆の資調、殆ど國家の用と為さず（『晋書』卷九八桓温伝）。

とあり、自分の都督管轄圏内を建康政府から分離させ、時期が自分に有利にまわってくるのを待ちつづける。その脅威の

表Ⅱ-2 征西大將軍・開府儀同三司・都督荊司雍益梁寧
交広八州諸軍事・荊州刺史（348年—363年）

職名	人名	出身地	備考	典拠
長史	孟嘉 車胤 范汪	江夏南平 南陽	後侍中 安西長史より（不就）	『晋書』卷98 卷83 卷75
司馬	謝安	陳郡陽夏	三六〇年出仕	卷79
從事中郎	孟孫 超	江夏太原 中都下邳	↑長史へ 安西參軍より，後長沙太守へ 田曹中郎	卷98 卷82 『世説』賞譽篇
參軍	劉耽	南陽	『陶淵明集』卷五「晋故征西 大將軍長史孟府君伝」	『晋書』卷61
	孟嘉 羅含 晉鑿齒 毛穆之 郝隆 毛玄	江夏桂陽 萊陽襄陽 榮陽陽武 汲郡潁川	↑從事中郎へ 戸曹參軍，郎中令，後侍中 戸曹參軍より別駕へ 太尉參軍 行（軍）參軍	卷98 卷92 卷82 卷81 『世説』排調篇 『世説』言語篇
掾属	郝超	高平金郷	会稽王昱の撫軍掾より	『晋書』卷67

対象である桓温が如何なる態勢を取ったかは、建康政府の最大の関心事であったにちがいない。それでは、桓温は征西大將軍府（表Ⅱ-2）においていったいどのような体制を構築するのであろうか。

征西大將軍府の最も顕著な特徴として指摘し得る点は、荊江地域の人が数多く重用されていたという事実である。先ず、長史の孟嘉は、桓温伝に附伝されている。彼は呉の司空の孟宗の曾孫であるから南人である。さらに彼は江南廬江の有名な陶侃の女を娶ったので、江南の典型的な寒門であることが立証される。陶侃の孫の陶淵明は彼のために「晋故征西大將軍長史孟府君伝」を書き遺している。桓温に辟召される以前の孟嘉の官歴は、江州刺史庾亮の部廬陵従事、勸学従事にしか過ぎない低いものであった。つまり、典型的な地方の田舎豪族である彼を、桓温は州職から抜擢して参軍に任じ、また昇進させて従事中郎へ、さらに長史へ任用するという異

例としか言えない人事を行なっている。またもう一人の長史の車胤も南平人で、やはり南人寒門である。彼は桓温によって荊州従事、主簿、別駕の州職を経て、長史となり、最後には遂に朝廷に名を顕して「時に惟だ胤と呉隱之のみ、寒素博学を以て名を世に知ら」れていたといわれた。同じく「寒素」といわれた呉隱之も、やはり桓温に知賞されて朝廷の清頭に登った人物である。そ

のほか、劉耽、羅含、そして『漢晋春秋』の著者として有名な習鑿齒などが荊州の名士である。特に劉耽は桓温の子の桓玄の舅である。

もちろん、以上の彼らは征西府の全府僚の中、わずか一部分に過ぎない人々である。しかしながら、或る特定時期に、或る特定地域の人物が突出してくる情況は、注目すべき事象である。それでは、その状態は如何なる意図の表出であろうか。東晋下において多くの南人たちは、不遇の目にあっていた。わけても荊江地域の人々は東晋の成立事情からして、ほとんど建康政府に加わることができなかった^③。そうした不満をもつ人々を、桓温は自分の幕下に入れて、荊州を中心として地盤を固め、建康の清談貴族政府との対抗姿勢をはっきりと打ち出した、と理解せざるを得ない。少し後のことではあるが、

（桓）温、時に方に屈滞を起し以て朝廷を傾げんとす。（范）汪遠来し己に詣ると謂い、身を傾け引望し、……（『晋書』卷七五范汪伝）。

とあり、桓温の建康政府に対抗する政策の一端が窺われる。桓温はこうした建康政権から疎外されていた諸不満勢力を都督府に結集させ、荊州を中心に反建康政権勢力を形成していったのである。要するに、建康の会稽王側の清談貴族らが、桓温勢力に対して対抗意識を持ち、それを抑えようとする動きがある限り、桓温の將軍府は反建康政府の性格を益々強めていくのは必至であった。

しかし、その頃すでに、もと安西府の幕僚であった北来貴族の范汪と孫盛らは、桓温への協力を拒否していた。それは征西府に辟召された大勢の荊州の田舎豪族と肩を並べることが、北来名族の彼らの自尊心が許さなかったからかも知れない。ともあれ、彼らが桓温の野心を見抜いていたことは間違いない。威勢を以て朝廷を傾けようとする桓温にとって、南陽の名族であり、しかも儒学者である范汪の離反は痛いものであったろう。彼ら二人は、前述の如く会稽王輔政後半期において貴族の意識轉換の必要性を披瀝した人物であったことを喚起しておこう。

さて、一方の会稽王を中心とした建康政府は、中原の大混乱を前にして北伐の絶好の機会を桓温に与えてなるものかとはばかりに、これまでの平和政策を投げ出して北伐を急ぐ。建康政府は、揚州刺史の殷浩を中心に何回も北伐にのりだしたが、すべて悲惨な結果に終わってしまった。

建康政府側の北伐が犠牲をもちたらずだけに終わったのをうけ、それを待ちかまえていた桓温は、永和一〇年(三五四)揚州刺史殷浩を失脚させ、自ら北伐に臨む。永和十二年(三五六)桓温は、ついに洛陽の奪還に成功し、東晋はじまって以来の変わらぬ悲願でありつづけた北伐の大功を立てて凱旋した。この捷報が東晋の朝廷をどれほど興奮させたかは想像にあまりあるだろう。そのころ、桓温は北伐を利用して次第に州鎮を蚕食していく。弟の桓雲が、三五六頃、江州刺史となり、ひとたび桓温の手に入った江州刺史は、桓氏一族の荊江軍閥の基盤を成す。続いて、桓温は江州の隣の豫州刺史を狙う。升平二年(三五八)豫州刺史の謝奕が死ぬと、桓温は桓雲を推すが、建康の貴族によって阻まれ、代わりに続けて謝氏の謝万が任命される^④。このことは、まだ桓温の意志がそのまま建康政府に十分に貫徹されていないことを意味する。ところで、建康政府にとって最も頼るべき軍鎮は徐州の京口の北府軍団である。会稽王は、その北府にも反桓温派の郗曇、范汪、庾希らを引続き任命し、桓温と対抗させる。桓温も、その豫州と徐州の都督権を手に入れるために、征討大都督の地位を利用して、立て続けに北伐軍を送り出しては、北伐の失敗の責任を問い、しきりに豫州と徐州の指揮官を罷免させる。だが二つの州鎮はまだ桓温の勢力下には入らず、しばらく建康側の反桓温軍団として機能する。

しかし、豫州刺史の謝万はまもなく桓温によって廃される。その処置によって、陳郡謝氏は、三四六年以来掌握しつづけてきた豫州刺史の軍権を失うようになる。この時点で会稽で逸民生活を楽しんでいた謝安が、四十歳を過ぎて出仕し、桓温の司馬の任に就く。清談貴族の間で「安石(謝安)肯えて出でずんば、將た蒼生を如何せん」と言われたほどの彼は、桓温に甚だ優遇される。もう一人、もと会稽王昱の掾属であった郗超も桓温の掾属となる。このように謝安、郗超らが桓温の府僚として加わったことは、桓温の府が次第に会稽王の勢力圏に食い込んでいることを意味する。

かくの如く、ひしひしと迫ってくる桓温の軍閥勢力を前に、会稽王の周囲でのんびりと清談に耽って政治を省みなかった建康貴族の有様に、一部の貴族は危機意識を覚えざるを得なかったのであろう。その清談貴族の有様とは裏腹に、桓温の功勲が高まるにつれて、桓温をもし立てている建康の貴族層から除外されていた諸不満勢力が、建康の無能な貴族と違ってかわろうとする動きが益々強くなるのは必至である。かかる桓温を中心に結集された反建康政府集団が激しい勢いで肉薄してくる事態に対して、その豫断を許さない政局を自覚していた一部貴族の憂慮と反省こそが、前述の老荘思想を批判し儒教を復興させて貴族の意識転換と政治改革を迫る新しい傾向を生み出したのであったと考えられる。先述の東晋中期の政治思想界における新氣運の背景には、こうした政治状況が存在していたのである。しかしながら、そうした傾向は依然として一部改革論者の意見に過ぎず、大方の貴族の輿論ではなかったようである。つまり当時の政界には、新たな政治紀綱の確立を主張する改革論者があり、亦たもう一方では依然として清談貴族が多数を占めていた。とはいえ、建康貴族の間にこれという亀裂がみられないところは大きい注目すべき点である。それには建康政府の首班会稽王昱がほとんど専権を振おうとせず、彼自身が貴族の一員として、貴族の既存の秩序を全面的に認めた上で貴族合意制の政治を行なったことに重要な要因がある。以上の桓温の征西府は、軍府の上層部を北来貴族が占めていたこれまでの荊江軍閥の將軍府と異なるばかりでなく、建康貴族の有様に自省を促している点でも、東晋初期のそれとは相違した側面を確認することができる。一方、桓温は洛陽の駐屯軍が燕の攻撃を受けると、救援軍を送り込みながらほとんど実現不可能な洛陽遷都論を持ち出して朝廷を脅しつける。桓温の議論を押さえつけるほどの実力をもたなかった朝廷は、桓温を恐れ、ついに三六三年彼に侍中・大司馬・都督中外諸軍事の肩書を加える。このように朝廷を壟断した桓温が、何故に王朝革命に失敗するのであろうか。その原因を桓温の大司馬府を通じて探ってみよう。

③ 大司馬・都督中外諸軍事・揚州牧

都督中外諸軍事に任命された桓温は、大軍を率いて姑孰に鎮し、一連の内政改革策、便宜七事を上疏する。その内容は、

朋党を抑えること、冗官を併省すること、文案の処理期限を守ること、褒貶賞罰を実当すること等々である。『晋書』の記載が極めて疎略なので、具体的なことは知るすべもない。ただ省官併職については『太平御覽』にやや詳しい逸文があり、その実施の結果は『晋書』職官志などから確認することができる。^⑤ その改革案が会稽王とその周りの放漫な政務態度を引き締めるものであったことはいうまでもない。^⑥

次に、桓温は有名な庚戌土断を実施する。

興寧二年(三六四)三月庚戌朔、大いに戸人を聞し、法禁を厳しくす。称して庚戌制と為す(『晋書』卷八哀帝紀)。

大司馬桓温に至るに及び、民定本無きを以て、治を傷むこと深しと為し、庚戌土断、以て其の業を一にす。時に財阜み国豊かなること、実に此に由る(『宋書』卷二武帝紀)^⑦。

とあり、それが相当厳しい取締りを行なったものであったことは、

庚戌制蔵戸を得ざるに会い、(彭城王司馬)玄五戸を匿す。桓温は玄の禁を犯すを表して、収えて廷尉に付す(『晋書』卷三七宗室彭城穆王権伝)。

によって窺われる。土断の実施は、黄白籍の問題と僑州郡県の問題とも絡み合って非常に複雑で、いまなお分からない点が多い。その複雑な問題は暫くおき、この庚戌土断が、流寓僑民の転落・浮浪人化、豪族の下へ依附・奴客化を阻止する措置であったのは間違いないであろう。この時の土断も僑郡県の実土化作業はほとんど行なわれなかった^⑧ので、庚戌土断というのも、一般の亡戸・蔵戸を摘発する戸口検閲とそう変わらないものであったようである。そう考えると、この土断によって最も打撃を被ったのは、多くの労働力を必要とする荘園地帯の呉会の豪族であっただろう。有名な三三〇年代の会稽郡餘姚令の山濫の事例の如く、県令が江南豪族を取り締まろうとしたことが、かえって政府と豪族によって県令自身の免官を引き起こしたことのような状況^⑨に対して、桓温は強力な行政権を発動させたのであろう。その庚戌土断の成果は数年後、咸安年間からあらわれる。咸安元年(三七二)に「詔して京都に経年の儲有るを以て、権に一年の運を停む」とあり、

さらに咸安二年（三七二）には群僚の常俸を増す詔を出している^⑩。もう一つ劉波は太元十四年（三八九）の上疏の中で「今、政煩わしく役殷ん、所在に凋弊し、倉廩空虚し、国用傾竭し、下民侵削せられ、流亡相い属ぐ。戸口を略計するに、但だ咸安已来、十に分して三を去る」とあり、その中の「咸安」も庚戌土断によって得られた成果を表現している年号である。庚戌土断による「財は阜み、国は豊か」という状況は、今その実態を知り得る材料は全くないが、それを推定し得るものがある。東晋成立以来、勲功をたてた功臣の賜賚の際、銭が贈られた場合はほとんどなかった。東晋最高の元勲である王導さえも例外ではなかった。しかしその様子の一変するのが桓温の時代からである。銭だけをみてみよう。桓温に対して、三六九年夫人の南康公主が亡くなった時に百万、簡文帝即位の時に五千万、また桓温の死んだ時に二回にわたって五千二百万銭が贈られた。そのほかにも後に肥水の戦の勝利の功労者たち——桓冲、謝安、謝玄、桓伊——にも百万銭ずつ賜賚されている。かかる大量の銭の賜与は当時の豊富な財政を抜きにしては考えられないことであろう。この銭の流通は次の時代に盛んになる廃銭論と寒人の登場とも深い関係がある。後のことはともかく、桓温の庚戌土断の成果が相当なものであったのは確かだろう。即ち、桓温は東晋の王導以来の寛縦の政治に対して、相当思い切った改革を実行したのである。それらの諸改革は、東晋初期からの傾向に対して新しい局面を開くものであった。

以上の一連の諸改革を実行させた中枢が桓温の大司馬府（表Ⅱ—3）の幕僚であったと考えるが、それは如何なる変貌をみせるのだろうか。

桓温の大司馬府の僚佐は、彼の征西將軍府とは一変した様相をみせる。まず桓温勢力の根拠地である荊州の人士がほとんどみえない。彼らの中、車胤、羅威のように朝廷の侍中にまで進出した者もあるが、多くは次の荊州刺史である桓温の弟の桓豁の府に仕えていたのであろう。ただ一人南陽の劉簡がみえるが、彼は桓温の征西參軍劉耽の兄で、荊州に移り住んだ北来の名族である。

しかし、それにもまして意外なことは、桓温の大司馬府に江東の一流豪族が全くみえないことである。ただ一人、有名

表Ⅱ-3 大司馬・都督中外諸軍事・揚州牧(363年—373年)

職名	人名	出身地	備考	典拠
長史	王坦之	太原晋陽	撫軍司馬より	『晋書』巻75
司馬	刁彝	渤海饒安		巻86張天錫伝
從事中郎				
參軍	江灌 郗超 王珣 王徽 袁宏	陳留圉人 高平金鄉 琅邪臨沂 琅邪臨沂 陳郡陽夏	撫軍司馬より、諮議參軍 記室參軍 大司馬主簿より 後桓沖の車騎騎兵參軍へ 記室參軍、『通鑑』永和十二年は太和四年の誤り。	巻83 巻67 巻65 巻80 巻92
	伏願 顧愷 桓胤 趙劉 鄧	平昌安丘 晋陵無錫 譙郡鍾鼎 下邳 南陽 陳郡	參軍、左衛將軍 東曹參軍	巻92 巻92 巻81 『世説』賞譽篇 『世説』方正篇 『世説』黜免篇
掾属	王珣	琅邪臨沂	↑主簿、桓温死後桓沖の中 軍長史へ	『晋書』巻65
	謝玄 袁方平	陳郡陽夏 陳郡陽夏	桓温死後桓豁の征西司馬へ	巻79 巻83

揚州の州職の者を自分の心膂にあたる大司馬府の僚属として抜擢して使ってはいないのである。

ほかの角度からもその問題を追跡してみよう。会稽王昱が輔政にあたった永和二年(三四六)から薨する咸安二年(三七二)までを、二期に分けて考えてみよう。会稽王が実権を握っていた三四六年から三六三年までを前期とし、桓温が大司馬として政局を左右した三六三年から以降を後期としよう。東晋以来の政治は尚書を中心として運営されていた。^⑩ その尚書省

な「女史箴圖」を描いた晋陵の顧愷之がみえる。彼は文化人として参軍となり、桓温に甚だ親昵された。彼の父は揚州刺史殷浩の故吏で、のち州別駕となつたことから推して考えてみると、東晋以後目ざましく開発された晋陵の新興豪族ともいえるであろう。もちろん、現存の史料の中から桓温府に呉、会稽、丹楊などの名族が一人も検出されないとしても、実際に彼らが全くいなかったとは言いつれないであろう。しかしながら、少なくとも揚州の豪族が桓温の大司馬府でさしたる重要な役割を演じなかったのは史料の上からみて紛れもない事実であろう。もし桓温の重要な腹心に江東豪族があったならば、何らかの形であらわれるはずなのに、その痕跡が全くみえないのである。もちろん桓温は揚州牧を領しているので、揚州の豪族を配下に率いてはいる。しかし、

の要官を調べてみると、前期には、三四六年から三五一一年まで呉郡顧和が尚書令に、三四五年から三四六年まで呉郡顧衆が尚書僕射に、会稽謝奉は何時からかは定かではないが三六二年頃まで吏部尚書を勤めた。ちなみに東晋治世中、南人が刺史になるのは稀なことであるが、会稽の謝永が江州刺史になったのも前期に該当する^⑧。ところが、桓温執政期にあたる後期には一人の南人も見いだせないのである。つまり、会稽王執政初期は東晋初期以来の寛厚の政術を継承し、江東豪強を放任する政策をとり、北来貴族と江東豪族との提携による政治を施行した。それに対して桓温は、軍隊を後ろ楯にしてこれまでほとんど行政的なメスを入れることがなかった呉会豪族に対して、立ち入った処置をとったと考える。一方、江東豪族にとっては桓温の改革はもちろんのこと、北伐ということも非常に迷惑なものであったにちがいない。それが桓温と江東豪族との関係を悪化させたと考えられないであろうか。その関係の反映されているのが、桓温の大司馬府の構成にほかならない。

さて、桓温は、会稽王を政治の首班の地位に据えたものの、会稽王の撫軍府の幕僚のうち、有力な人物を自分の幕下に入れ、会稽王の勢力を形骸化させる。会稽王の撫軍司馬から召された大司馬長史の王坦之、諮議參軍の江灌がその代表的な例である。ほかに、大司馬の掾、主簿である琅邪の王珣は「時に温、中夏を経略し、竟に寧歳無し、軍中の機務並びに珣に委ぬ。文武数万人、悉く其の面を識る」という協力ぶりである。また掾である陳郡の謝玄も甚だ桓温に礼重された。このようにみると、桓温の大司馬府はおおかたの北来貴族が優遇された幕府である。また、北来貴族もはやゆるがせにできない実力者軍閥桓温が、北来貴族を優位に置く既存の体制を認めることを確認した以上、会稽王の代わりに桓温への協力を惜しむ必要はなからう。桓温への協力の拒否はいままで築き上げてきた門戸に、危機をもたらすかもしれない。また桓温にとっては、内政改革のために不可欠のことであったが、江東豪族との関係を緊密にすることができなかった。そうなるとうなると、桓温が建康に乗り込むためには北来貴族の協力が是非とも必要となってくる。一方、建康の北来貴族の中にも、すでにみたように改革の必要性を痛感している人たちが抬頭している。そうした諸要因が、桓温と北来貴族との協力を可

能にさせたのであろう。ここで我々は桓温がもともと貴族より出て、荊州軍閥の首領となりながら、さらに既存の貴族の身分社会の上に自己の支配権を樹立しようとした意図を読みとることができる。

ところが、桓温の謀主は参軍の高平郗超である。彼は桓温に「不軌の心」あるを知り、海西公の廢立の謀議をはじめて勧めた腹心である。史料による限り、桓温の晋朝篡奪を積極的に画策しているのは、郗超のみである。彼のほかに史料にあらわれていない多くの桓温幕下の軍將達も、また桓温を担ぎあげていたのであろう。それでは名族の後裔である郗超は、何故に桓温の懐刀となつて、桓温のために廢立の計画をたてるなどの辣腕をふるつたのであろうか。彼は元々会稽王昱の幕僚であつた(表一参照)。施しを好み談論をよくし、「一時の僞」として、世に「盛徳絶倫なる郗超」と称賛されたほどの彼であつたが、会稽王には重んじられなかつた^⑩。しかも「曠世の度」ある彼は、軍謀の方面にも優れて北伐の際には的確な戦略も献じた。彼の祖父は、北府軍団の根幹を形成した郗鑒である。郗鑒の刻苦の所産である徐兗州流民からなる北府軍団は、彼の死後、建康政府の藩屏の如き役割を担つた。その北府軍団が今や政争に利用され、全く軍事経験の無い会稽王側の清談貴族の手に委ねられ、北伐は悉く失敗を繰り返している。それは、彼にとつては耐え難いことであつたらう。そこで、郗超は「雄略有る」桓温に、自分の影響力の下にある北府軍団を統べしめ、荊江軍団と北府軍団の兩大軍団を土台にして、北伐を達成し、桓温を君主に奉じようとしたのではなからうか^⑪。むかし、東晋王朝の北来貴族にとつて最大の国家目標は中原を恢復することであつた。しかるに、次第に北来貴族に世俗を逃避し極度に洗練された文人清談貴族を理想像とする風潮が蔓延していった。この北来貴族の相い矛盾するジレンマを前にして、桓温と郗超は前者を闡明に打ち出している点で共通していたのである。実際に桓温は、北府の庾希を免官させてから、後任に「北府と故義有る」郗鑒の子の郗愔を任命した。しかしすでに桓温の意を汲み取つた郗超が、父の北府を桓温に譲らせる。そうして、もくろみ通り北府を手中に収めた桓温は「平北將軍・都督・徐兗二州刺史」郗愔の平北將軍府をそのまま兼領している。その事柄からも郗氏影響力下の北府軍団をそのまま引き受けていることが示唆される^⑫。

さて、内政を整え、更に東晋のすべての州鎮軍統帥権を桓氏一門に掌握した桓温は、その比類なき軍事力をバックに、三十七年、海西公を廢位させ、会稽王昱、即ち簡文帝を登極させる。翌年簡文帝が病いに倒れると、桓温側は露骨に禪位を要求するが、朝廷の尚書僕射の琅邪王彪之、吏部尚書の陳郡謝安、侍中の太原王坦之らは、簡文帝の子の孝武帝に帝位を伝える。さらに桓温に禪代させる文案作成をわざと遅らせる。その間、重病の桓温は東晋王朝の篡奪あと一歩のところを生涯を閉じてしまうのである。寧康元年（三七三）のことである。

以上に述べたことをまとめると次のようになる。東晋初期の清談貴族の政務に対する放漫寛縦な態度は、司馬昱の輔政期になって、さらにその度を増していく。東晋成立以来のこうした趨勢に対して、桓温は、清談貴族の引締めに取り掛かり、北伐の断行、制度の整備、行政の改革等々の一連の改革を断行する。そうした桓温の諸施策が、東晋初期以来継続されてきた傾向と断絶の側面をもつことを確認し、桓温政権による新しい方向を以て東晋中期と画分したのである。とはいっても、桓温は貴族制そのものを否定したわけではなく、あくまでも自分も属している貴族の身分秩序の上に立って諸改革を実行した。しかしながら、そのような改革はどうしても背後の諸勢力、つまり反貴族的な荊州豪族、寒門軍將、寒人などを前面に抬頭させる機会になりにかねなかつたので、桓温の王朝移譲は、北来貴族の団結の壁にぶつかり挫折してしまつたのである。

だが、桓温自身の王朝革命は失敗に終わったものの、彼による一連の改革が後の政治に甚大な影響を及ぼしたことは付言するまでもないであろう。ところで、桓温の野心を挫衄させた功績は健康貴族に帰せられるが、如何なる所以で謝氏一族が政界の頂点に躍り出るのであるのか。章を改めて考察しよう。

① 『陶淵明集』巻五「晋故征西大将军長史孟府君伝」

② 『晋書』巻九〇良吏臧之伝。

③ 前掲（はじめに註③）の拙稿「東晋政権の成立過程——元帝（司馬

容）の府僚を中心として——」参照。

④ 『晋書』巻七六王彪之伝に「簡文曰人有季桓雲者、君謂如何。（尚

書僕射琅邪王）彪之曰雲不必非才、然温居上流、割天下之半、其弟復

処西藩、兵權尽出一門、亦非深根固蒂之宜也。人才非可豫量、但當令

不与殿下作異者耳。簡文領曰君言是也」とある。

⑤ 前掲(はじめに註①)の川合安「桓温の省官併職政策とその背景」参照。

⑥ その一例が『世説新語』政事第三に「簡文為相、事動經年、然後得過。桓公甚思其遲、常加勸勉。太宗(簡文)曰一日万機、那得遲」とある。

⑦ 『宋書』卷二武帝紀にその文の前に「自永嘉播越、爰託淮海、朝有匡復之冀、民懷思本之心、經略之圖、日不暇給。是以寧民緩治、猶有未遑」とある。

⑧ 安田二郎「備州郡県制と土断」(『中國貴族制社会の研究』、一九八七年)。また土断についての諸論文は安田氏の論文の注を参照されたい。

⑨ 『晋書』卷四三山遐伝に「(山)遐為餘姚令(会稽郡)。時江左初基、法禁寬弛。豪族多挾蔽戸口、以為私附。遐繩以峻法、到県八旬、出口万餘。県人咸喜以蔽戸当棄死、遐欲繩喜。諸豪強莫不切齒於遐。言於執事、以喜有高節、不宜屈辱。又以遐輒造鼎舍、遂陷其罪。遐与会稽内史何充牋、乞留百日、窮窮遁逃。退而就罪、無恨也。充申理、不能得。竟坐免官」とある。

⑩ 『晋書』卷九簡文帝紀咸安元年十二月条と咸安二年三月条。

⑪ 『晋書』卷六九劉波伝。

⑫ 宮崎市定「第三章 南朝における流品の発達 二 尚書の人事権掌 握」(『九品官人法の研究』、一九五六年)。また矢野主税「東晋における南北人対立問題——その政治的考察——」(『東洋史研究』二六一—三、

一九六七年)は、論旨には首肯し難いが、尚書省の人物を考察したものととして参考になる。

⑬ 顧和は『晋書』卷八三、顧衆は卷七六、謝奉は『世説新語』雅量篇、謝永は『陶淵明集』卷五「晋故征西大將軍長史孟府君伝」にみえる。

⑭ 『通鑑』卷九七晋紀一九穆帝永和元年(三四五)正月壬戌条に「以会稽王昱為撫軍大將軍、録尚書六条事。昱清虛寡欲、尤善玄言、常以劉恢、王濛及潁川韓伯為談客、又辟鄒超為撫軍掾、謝万為從事中郎。超、鑿之孫也、少卓犖不羈。父愔、簡默冲退而蓄於財、積錢至數千万、嘗開庫任超所取、超故施親故、一日都尽。(胡注：史言鄒超才具足以用世、晋朝不能用、惜其為桓温用也)とある。傍線部分が何に困ったかは不明であるが、現行の『晋書』には見あたらない。ちなみに胡注の意見は傾聴すべきであろう。

⑮ 宮川尚志「第二章 禪讓による王朝革命の研究 第五節 東晋の桓温・桓玄の禪代企図」(『六朝史研究 政治・社会篇』、平楽寺書店、一九六四年)一一二頁の「これは京口、すなわち後の北府系軍閥と荆江軍閥の妥協合作と見られる」という一節は示唆に富んでいる。

⑯ 桓温の死んだ時の肩書は「使持節・侍中・都督中外諸軍事・丞相・録尚書・大司馬・揚州牧・平北將軍・徐兗二州刺史、南郡公」(『晋書』卷九孝武帝紀)であった。その平北將軍府の幕僚として平北司馬卞耽、參軍劉爽、高平太守鄒逸之、遊軍督護郭龍などがみえる(『晋書』卷七三庾希伝)。

3 謝 安

後漢以来の名族ではなかった謝氏一族の発展の第一の転機となったのが、東晋の初め謝鯤が老莊思想を受け入れて、清談貴族の仲間入りができたことである。謝氏発展の第二の転機は、三四五年頃、謝鯤の子の謝尚が豫州へ出鎮することで

ある。これから三五九年まで、豫州は謝氏一族の勢力基盤となり、その頃から謝氏一族は政界に急浮上する。謝尚は豫州刺史として、時には北伐に参戦し、西晋末に異民族に奪取された伝国璽を得る功績をあげたり、殷浩の北伐が失敗し、建康政府が危機に立たされた時には、朝廷に入り尚書僕射を署したり、大活躍をした。その後は謝奕、謝万が引続いて豫州軍団を統領する。

では、謝氏が都督・豫州刺史の統帥権を持ち続けたということとは、如何なる意味をもつのであろうか。六朝時代には、敵国との軍事的な対峙のために將軍府が発達せざるを得なかった。前述のように、その將軍府が東晋では都督と結合し、州刺史府の上に都督府を常設するようになった。皇帝権が微弱な東晋時代に、都督府は膨大な文武属官を領し地方行政までも統括するようになり、地方分割の拠点となった。一方、魏晋以来の兵力は世襲兵戸によるものであったが、それも東晋中期には廃れ、募兵が行なわれるようになる。^②募兵による主将与兵士との間には新たな私的結合を形成し、その主将を軍主・隊主と呼んだが、その名称の最初に出てくるのが謝万伝である。^③その謝万の武将である征虜將軍劉建は、のち北晋軍団將謝玄の餘りにも有名な軍將劉牢之の父である。彼の外にも多くの武将たちが豫州刺史謝氏一族と私的情意關係を結んでいたのであろう。それは譙郡桓氏の場合も同じである。桓氏の主力軍として廬江周氏、義陽朱氏、陳郡邵氏などが代々仕えている。なお軍隊ばかりではなく、中世において門生・故吏も特別な意味をもっている。^④また、州鎮を一族が引き続き帶領するためには、管轄下の人々に善政を施し良い輿論をつくっていくかねばならない。例えば「從兄（謝）尚徳政有り。既に卒し、西藩の思う所と為り、朝議（謝）奕の立行素有るを以て、必ず能く尚の事を嗣ぐ」とある如く、一般民衆の支持も門戸の発展に重要な要素であった。そうした様々な人間關係を結ぶ最大の場が都督であり、その意味で謝尚の徳政は謝氏発展の基盤を成したといえる。

さて、都督豫州は荊州と揚州の間に挟まり、歴陽、寿春などの鎮所を転々と移動しながら、中原攻略の際には最先鋒となるところである。換言すれば、豫州軍団は当時の情勢からみて建康の会稽王政權と荊州の桓温軍団の間に位置していた

のである。謝尚の善政の後をうけ、謝奕、謝方が引続き豫州に任命された。しかしながら謝方は將帥の資質が無く北征に失敗し、桓温によって罷免されてしまう。そこで謝氏一門の豫州の軍事基盤は消え失せてしまったのである。

ここに至り、固く出仕を拒んでいた謝安が、三六〇年隱棲の身を起し、ほかでもなく桓温の征西府の司馬に就き、桓温を大いに感激させる。この謝安の出仕をめぐることは従来様々に議論されてきたが、その真相はどうであったろうか。それはいわゆる「門戸の計」であったに違いない^⑥。それを立証するためには、振り返って先述の会稽王昱と桓温の政争期における謝氏の動静を鋭意注視し検討してみる必要がある。謝氏は、今までみてきたように桓氏と同じ豫州の出身で、両族の政界における抬頭の道には甚だ共通点が多かった。ところが、会稽王の建康政府と一方の桓温の荊江軍閥との兩大勢力が対立していた約三〇年間、謝氏一家は、豫州を軍事基盤として成長しながら、兩大勢力の間をどちらにも少しも傾くと無く、絶妙といえるほど均衡を保っていた点は、大いに注目にあたいする。それこそが、この政治の季節に謝氏が桓温の野心をくじき、南朝第一の門閥として発展し得た最大の要因であったと考えられるのである。

具体的にみてみよう。会稽王側(表Ⅰ参照)には、先ず謝尚が会稽王の友となっており、会稽王の撫軍従事中郎には謝方がついている。さらに三五三年には謝尚が尚書僕射として会稽王の百揆を賛ずる。三七二年からは謝安が朝廷に入り、吏部尚書の要職を担いつづけている。

一方の桓温側には安西司馬に謝奕がみえる(表Ⅱ-1参照)。謝奕と桓温の間柄の敦篤ぶりは『世説新語』にみえる通り並みものではなかったようである^⑦。そうした密接な桓氏と謝氏との関係はその後も続いた。三六〇年、桓温の征西司馬に謝安が就いたのも、その直前の三五九年一月に豫州刺史の弟の謝方が桓温によって廃黜されたことによって生じた両家の気兼ねを取り除き、謝氏門戸の安全を確保するために取った行動であったと考える(表Ⅱ-2参照)。しばらくして謝安が建康へ去ってからは、甥の謝玄が大司馬桓温の掾となり、桓温の死んだ後は征西大將軍・荊州刺史桓豁の司馬・領南郡相として、三七七年まで荊州の、それも桓氏勢力のまっただなかに留まり続けていたのである(表Ⅱ-3参照)。こうし

た関係が簡文帝の危篤の時、桓温が謝安を薦して顧命を受けさせた理由であったろう。つまり、長い政争の間、謝氏はあらゆる情況を勘案した上で、兩大勢力のどちら側にも傾くことなく、巧妙に危機をくぐり抜けてきたのである。謝安のその徹底的な計算の上に講じた秘策に、まんまとのまれてしまった桓温の、彼に対する信任こそが、最後に桓温自らが自分の足をすくわれる結果を引き起こしたのである。それはまさに、謝安の政治的感覚と気宇広大さの勝利であったとしか言えないであろう。したがって、桓温の野心を挫折させた功績が、謝安一門に帰することは当然の結果であろう。そうした謝氏の方針は、簡文帝と桓温との政争の際、殷氏や庾氏などが簡文帝側に密着したため、結局桓温によって族滅されたこととは対照的な例である。以上のようにして、政権の頂点に上り清談貴族に支持された謝安執政を、外戚政治と規定してしまうのは、やはり片手落ちの観を免れないであろう。^⑧

さて、次に、謝安による桓温死後の諸施策を検討することによって、謝安の政治方針を考察してみよう。桓温の死の前、朝廷の政務は、尚書僕射の琅邪王彪之、中書令の太原王坦之、そして吏部尚書の陳郡謝安によって総轄された。もちろん桓温の野心を挫折させた最大の功績は謝安の度胸によるものではあるが、実際はその三人の協力によるものでもあった。桓温の死後、謝安は褚太後の臨朝体制を貫きながら、桓氏一門に独占されている軍権の回収に取り掛かり、そのかわら謝氏勢力を扶植していく。先ず、王彪之を尚書令に昇進させるが、当時の尚書令は適任者がなければ、空席にしておく名譽職にすぎないものであった。もう一人の王坦之は都督・徐州刺史として出鎮させ、謝安は尚書僕射・吏部尚書・後將軍・総関中書事として、朝廷の実権を一手に握ることができた。その三人の中、王彪之と王坦之の二人は先述したように改革派の系列に属する人々である。王彪之は、桓温によって殺された簡文帝の兄の武陵王晞の鎮軍司馬を歴任し、併官省職の改革を主張していた政治改革論者である。王坦之は簡文帝の撫軍司馬を歴任し、儒教の復興を力説していた清談反対論者である。彼ら二人は皇族の幕僚長として、桓温の抬頭とともに刻々と迫ってくる警戒すべき事態に対して無策のままには居られない立場であった。そうした状況が彼らに現政治に対する覚醒を餘儀なくさせたに違いない。しかるに、いま

朝廷の実権を掌握している謝安は『世説新語』にみえる謝安像通り、雅量と風流の清談貴族の代表者である。そうした謝安の性格は彼の政治運営にも反映されたはずである。

謝安が政治を主宰した三七三年から三八五年までの政治運営は、既に桓温によって行なわれた幾つかの改革を逆戻りさせるものであった。それは先ず第一に、併官省職された官制改革が早々と復置され、桓温の改革政治と訣別する^⑨。第二に、江東豪族との関係が再び密接になり、桓温の断行した豪族勢力の侵削政策は、寛縦な態度に戻ってしまった。つまり、北來貴族と江東豪族とが結び合った上に成り立つ東晋貴族政治が再現されたのである。その幾つかの事例を挙げてみよう。三八三年呉郡の名族の陸納が吏部尚書となり、翌年には尚書僕射に重用されている。また特殊な例として、三八三年桓冲は江州刺史に琅邪の王薈を輔することを請うたが、王薈が喪中を理由に辞したので、謝安は彼の代わりに中領軍謝輜を任命しようとした。その人事措置に桓冲は怒り、謝輜は文武に堪えぬものであるとして、自らその職を兼領してしまった^⑩。

この謝輜は謝安と同じ陳郡謝氏ではなく会稽の名族謝氏である。謝安と謝輜がどのような関係なのかは不明であるが、謝安が会稽の望族を優遇した一例としてみて間違いないだろう。また謝安の幕僚として、後將軍参軍の呉興沈警が甚だ敬重されているのも、江東豪族との親密な関係を示すものであろう。第三は謝安の清談好みの問題である。清談に対する非難は会稽王昱の輔政期に一部貴族自らによって相当な敵しい反省があった。にもかかわらず、謝安の清談好みは弱まるどころか、むしろ「衣冠、之を効ねて、遂に以て俗と成し」たという始末であった。彼は王坦之、王羲之らの「今、四郊に墨多し。宜しく自効を思うべし。而るに虚談は務を廃し、浮文は要を妨ぐ。恐らく当今の宜しき所に非ず」というねんごろな忠告に対して「秦は商鞅に任せ、二世にして亡ぶ。豈に清言患を致さんや」とやり返す有様であった^⑪。併せて別墅での豪華贅沢ぶりは世の誇りを浴びて当然のものであった。故に「然れども繁会を暮服の辰に激しくし、一飲を百金の費に敦くし、礼を嫌薄の俗に靡し、侈を耕戦の秋に崇うす。哀楽を混え婦を同じくし、奢儉を一致に齊しくせんと欲すると雖も、知らず、頽風已に扇ぎ、雅道日々に淪み、国の儀刑、豈に是の若きを期せんや」という史臣の酷評も当を得ているだろう。

結局、そうした謝氏一族の生活ぶりが、後の孫恩・盧循の豫乱の際に謝氏が多くの犠牲者を出した理由にもなるであろう。つまり、謝安の政策とは、清談貴族の優遇をはじめ、桓温の改革政策とは逆方向の保守的側面をもち、東晋初期以来の政治体質への復帰を意味するかのようなものであった。

一方、桓温の死後、彼の率いた軍隊は、中軍將軍・都督・揚豫州刺史の桓冲に受け継がれて統率される。桓温のその膨大な軍事力を引き渡された桓温の弟の桓冲は「謝安、時望を以て政を輔し、群情の帰する所と為り。冲、逼られんことを懼れて、寧康三年（三七五）乃ち揚州を解き、自ら外に出されんことを求む。桓氏の党与以為らく計に非ずと。腕を扼えて苦諫せざる莫し。郗超も亦た深く之を止む」。しかし、桓冲は皆聞き入れず、朝廷に忠言嘉謀、心力を尽くしたという。いったい、桓冲はなぜ当時の最も要職であった揚州刺史を自ら退いてしまったのであろうか。それはもとより桓冲の「忠誠心」が最たる要因であったかもしれないが、一方の「逼られんこと」とは如何なる勢力を想定してのことであらうか。まず考えられるのは、先に桓温は帝位を奪おうとして数多くの勢力を除去したので、当時の朝廷には桓氏に敵愾心をもつものが多かったこともその理由の一つであろう。また、桓温は一連の改革のため、江東豪族の勢力を侵削したので、両者の間に大きな溝があったことはすでに推論した如くである。つまり、桓冲を危懼させた勢力とは、建康の貴族と、特に地元の江東豪族勢力であったと考えられる。それを裏付ける例を一つあげよう。桓冲が揚州となった翌年、即ち寧康二年（三七四）呉興長城の武弁豪族である錢歩射、錢弘が党百人を集めて争乱を起こした。錢氏の反乱を起こした理由はいま知るすべもないが、武強豪族である錢氏が、桓温の改革の際にその勢力が削られたことに対して反撥したことではなからうかと推測してみる。その時、桓冲は桓温の故将である荊州義陽の名将朱序を、中軍司馬・呉興太守となして反乱を鎮圧する^⑤。そのことから桓冲の軍事力の根幹は荊州の軍将を中心としていたことが確認される。つまり、荊州の軍閥桓冲は、荊州の軍団を率いて危険な揚州に留まるよりは、謝安の人望を認め、彼の方針に協力するみちを選んだのであろう。それで揚州から徐州へ、さらに三七七年荊州刺史桓豁の死をうけて荊州へ移され、結局、最初の桓氏の勢力基盤の地にもどった

のである。

一方、謝安の政術は、東晋初期の王導に似て「常に鎮むるに和靖を以てし、御するに長算を以てす。徳政既に行なわれ、文武命を用う。小察を存せず、弘むるに大綱を以てし、威懐外に著わる」といわれた如く、寛容を以て諸勢力のバランスをとる調整者としての役割を果たすことであつた。その謝安の政治的力量の成果が、肥水の戦の勝利であつたのだろう。

前秦の侵攻の際に謝安は、甥の謝玄を北府の徐州となして迎え撃たせた。その際、北府の立て直しのために募集された軍将らは、我こそが国家の存亡を担っているかのように猛活躍をする。特に父がもと豫州の軍将であつた參軍劉牢之の活躍は目ざましいものであつた。そのように諸軍将を奮い立たせたのは謝安の日頃の徳政の結果であつたらう。そのほか、桓沖の協力、また桓温の改革によって準備された豊かな財政も、重要な勝因であつたに違いない。つまり、肥水の戦の勝利は、謝安の優れた政治力量による諸勢力の結集の成功の結果であつたといえる。その輝かしい功績によって、陳郡謝氏は最高門閥貴族としての地位を確固にすることに成功したのである。

しかし、肥水の戦の後、三八四年皇太后が亡くなると、孝武帝の弟の司馬道子は次第に専権を振るうようになり、謝安は朝廷から遠ざけられる。失意の謝安は北征を願い出てその準備中、太元一〇年(三八五)他界する。もう一人、謝安の政治方針によく協力した荊州の桓沖も、謝安より一年先に世を去つたのである。そもそも謝安には、肥水の戦で勝利をあげたものの、桓温の改革以来既に動きだしている社会底辺からの変化、即ち一部貴族の意識変化、寒門軍将の活躍、貨幣經濟の普及、及び寒人の登場等々の様々な新傾向に対処できる能力がなかつたのである。その累積した問題が謝安の死、即ち肥水の戦という国家非常事態の解除とともに一気に爆発する。それが東晋末期の政治史である。

① 謝氏一族は、『晋書』卷四九謝鯤伝に、祖の謝績が魏の典農中郎将、

父の謝衡は西晋の国子祭酒として儒素を以て名を顯した、とある。

③ 宮川尚志「南北朝の軍主・隊主・戎主等について」、『六朝史研究 政治・社会篇』、平楽寺書店、一九六四年。

② 浜口重国「魏晋南朝の兵戸制度の研究」、『秦漢隋唐史の研究』上巻、

④ 川勝義雄「門生故吏關係」、『六朝貴族制社会の研究』、岩波書店、一

⑤ 『晋書』卷七九謝安伝。

⑥ 田餘慶「陳郡謝氏与肥水之戦」、『東晋門閥政治』所収（二六〇頁）。

⑦ 『世説新語』簡傲第二四「桓宣武（桓温）作徐州、時謝奕為晉陵。

先粗絳虚懷、而乃無異常。及桓還荊州、將西之間、意氣甚篤。奕弗之疑。唯謝虎子婦王悟其旨。每日桓荊州用意殊異、必与晉陵俱西矣。俄

而引奕為司馬。奕既上、猶推布衣交。坐温在、岸幘嘯詠、無異常日。

宣武常曰、我方外司馬。遂因酒、軼無朝夕礼。桓舍入内、奕輒復隨去。後至奕醉、温往主許避之。主曰君無狂司馬、我何由得相見」。

⑧ 前掲（はじめに註①）の安田二郎「褚太後の臨朝と謝安」

⑨ 『晋書』卷九孝武帝紀寧康元年九月条に「復置光祿職、大司農、少

府官」とある。詳しくは前掲（はじめに註①）の川合安「桓温の省官併職政策とその背景」参照。

⑩ 『晋書』卷七四桓冲伝。

おわりに

従来の東晋史の研究は、以上のような政治史の跡付けの基礎作業がほとんど成されていないように推察される。不分明な点が多い東晋史の解明のためには、是非とも必要な研究過程ではなからうか。

東晋中期とは、「新出門戸」の譙郡桓氏と陳郡謝氏が、清談の才覚を備えて登場し、州鎮を勢力基盤として政權を掌握し、既存の貴族の身分秩序を認める上になつて、最高貴族への地位を目指して、各々政策を展開した時期である。故に、貴族の勢力は以前より一段と強化され、その最極盛を迎えるようになる。

荊州の寒門と軍將らを結集した桓温は、東晋成立以来の清談貴族の寛縦な政務体制に歯止めをかける改革推進派となる。その諸改革を実施した結果による政治と社会の変化は、これまでの傾向とは一線をひく新しい方向のものであったので、東晋中期と分期することができるだろう。しかし、改革を強行すると、必然的に反貴族的要素も抬頭してくる。それに反

⑪ 『宋書』卷六四裴松之伝。

⑫ 沈警は「宋書」卷一〇〇自序に「沈警）惇篤有行業、字通左氏春秋。家世富殖、財產累千金、仕郡主簿、後將軍謝安命為參軍、甚相敬重。警内足於財、為東南豪士、無仕進意、謝病婦、安固留不止、乃謂

警曰「沈參軍、卿有独善之志、不亦高乎」警曰「使君以道御物、前所以懷德而至、既無用佐時、故遂飲啄之願耳」還家積職、以素業自娛」とある。

⑬ 『晋書』卷七九謝安伝。

⑭ 『晋書』卷七九謝安伝。

⑮ 『晋書』卷七九謝安伝史臣曰条。

⑯ 『晋書』卷九孝武帝紀寧康二年一月条、卷八一朱序伝。

⑰ 『晋書』卷七九謝安伝。

発し、桓温の野心を挫折させた謝安は、北来の清談貴族と江東豪族を中心に、反動の保守派的側面の政策をとった。清談貴族による保守的政治運営は、肥水の戦で勝利を挙げ、清談も流行し、あたかも東晋初期の政治風潮へ逆戻りしたかのように見えるが、実はそれは表面的一時的なものに過ぎず、社会内部では桓温の改革以来はじまっている変化が益々加速化されていったに違いない。

つまり、東晋中期の政治を担った桓氏と謝氏は、改革と保守という相対立する政治運営過程において、どちらも社会底辺からの変化を収斂し、貴族の枠を越えて時代の要求に呼応できる自己発展的成長を成し遂げたとはいえない。その結果、東晋末期という大混乱が惹起され、これまで貴族の握っていた政治、軍事権は皇族と寒門軍将の手に渡される。そうした状況下で、貴族制と將軍府はどのように変貌されるのだろうか。さらに追究していきたい。

(京都大学研修員)

carry it out. As a result of this conflict between the government together with the village heads, town mayors and the elementary school principals on the one hand, and the Young Men's Associations on the other, the Voluntary Young Men's Parties (青年党) arose, which were different in character from the old age-based associations. They would thereafter support the Taisho Democracy with their projects to reform the town administration and their demands for universal suffrage.

In this paper on the case of the area of Tango in Kyoto Prefecture, the author traces in detail the development of the young men's organizations, and gives one example of the genesis of the Voluntary Young Men's Party out of the preceding age-based young men's association.

Huan Wea 桓温, Xie An 謝安 and Politics in the
Middle Period of the Eastern Jin 東晉

—Concentrating on the Staff Officers of Huan Wen—

by

KIM Minsoo

This article is a study of the governments of Huan Wen and Xie An, the significance of which has hitherto remained largely unclear. This paper seeks explanations for the authority and predominance of the northern immigrant aristocracy through the analysis of the structure of "the General's Office System" 將軍府, characteristic of the Six Dynasties period. Accordingly, the investigation of the contemporary state of politics is undertaken through an analysis of Huan Wen's general's office.

The investigation begins with the mutual involvement of Huan Wen, Xie An, and Si-ma Yu 司馬昱 in the following three areas. First traced is the background of the prosperity of "the Pure Conversation" 清談 around Si-ma Yu, and the rising of a trend of anti-Lao Zhuang 反老莊 thoughts among some aristocratic families. Second, the article clears the reasons for Huan Wen's switch of status from membership in the Pure Conversation School to a place in the military faction of Jing Zhou 荊州 and his succeeding transformation into leader of the Jian Kang 建康 clan. It leads to the explanation that Huan Wen was supported as a revolu-

tionary aristocratic leader by the lesser families and military leaders of the Jing Zhou. Third, the arrival on the scene of Xie An, the secrets of his grip to power, his policy and support are all brought to light, and his status as a conservative aristocrat supported by the northern immigrant aristocracy and the great landowning clans southeast of the Yangtze is confirmed.

Based on the conclusions of the foregoing analysis of political fundamentals in the middle period of the Eastern Jin, it is asserted that the appearance of the Huan clan of the Qiao 譙 commandery and the Xie clan of the Chen 陳 commandery as great houses of the bureaucratic oligarchy, and the process of opposition between them as revolutionary and conservative clans, marked the high tide of aristocratic power and also marked the appearance of a new anti-aristocratic trend.